



マックス・ラーベと パラスト・オーケストラ

—現代に生きる
20世紀ドイツ大衆歌謡—

国際コミュニケーション学部 吉本 篤子

ドイツやオーストリアの文化や芸術が日本で紹介されることは、アメリカやイギリスなど英語圏の国と比べるとかなり少ないですが、音楽の場合も、愛好家の多いクラシック音楽は別にして、大衆的な歌謡曲についてとなるとさらに知る機会は少ないでしょう。過去には女優マレーネ・ディートリヒも歌った「リリー・マルレーン」(Lili Marleen) やウド・ユルゲンスの「別れの朝」(Was ich dir sagen will—私のカラオケ定番曲です) など、単発的に日本で紹介されヒットした曲もありましたが、特定の歌手やジャンルが日本の多くの聴衆に親しまれる機会はあまりなかったように思います。

近年はインターネットのおかげで、前世紀よりずっと手軽に外国の音楽を聞けるようになりました。動画サイトなどで聞くことのできるドイツ音楽のなかから、今回は、ドイツの大衆歌謡の歌手マックス・ラーベ (Max Raabe, 1962-)



ラーベの作品、いろいろなテーマのCDがあります

とパラスト・オーケストラ (Palast Orchester) の曲をご紹介します。

ベルリンの音楽大学で声楽を学んでいたラーベは、1986年に大学の仲間とともにパラスト(宮殿)・オーケストラを結成し、ドイツの1920年代から30年代の流行歌やキャバレーソングを中心に歌ってきました。蝶ネクタイにタキシード、またはスーツを着用し、体の動きは少なく、その代わりに顔の表情ゆたかに歌うスタイルで演奏します。俳優のイッセー尾形らが企画したことを機に、2000年代に来日コンサートが実現し、日本でもラーベとパラスト・オーケストラの活動が知られるようになりました。

1920, 30年代のドイツ、ワイマール共和国は経済的、政治的に厳しい時代を迎えていたものの、文化的にはめざましい発展をとげていました。とくに当時、世界的大都市だったベルリンで20世紀初頭に生まれたキャバレー(ドイツ語ではカバレット Kabarett)では、流行歌や最先端の音楽、寸劇、詩の朗読などの大衆的な娯楽がさかんになり、夜ごとに多様なショー芸術が行われました。キャバレーは、従来 of 伝統的芸術や民衆娯楽に飽き足りなくなっていた当時の大都市住民に多様なジャンルの芸術を提供する場として受け入れられるようになりました。キャバレーで催された芸術活動の多くは、のちにナチスによって「退廃芸術」と攻撃されて文化的には力を失っていききましたが、戦後、キャバレーはある程度活気を取り戻します。ラーベとパラスト・オーケストラが手がけるのは、それらの音楽芸術のうち、どちらかといえば華やかで多くの大衆に親しまれる恋愛の流行歌や映画音楽などが多いように思います。

ラーベとパラスト・オーケストラの演奏曲のなかから、いくつか私のお気に入りの曲を紹介しましょう。まずは、20, 30年代の流行作曲家ヴェルナー・リヒャルト・ハイマン (Werner Richard Heymann, 1896-1961) の Irgendwo auf der Welt (世界のどこかで、1932年)です。ユダヤ系

ドイツ人のハイマンは、当時黄金時代を迎えた映画芸術の曲を多数手がけ、映画「会議は踊る」の作曲者としても知られています。Irgendwo, auf der Welt, gibt's ein kleines bisschen Glück... から始まるこの曲は、世界のどこかにある少しの幸せを見つけたいという願いを歌った、優しい気持ちになれる曲です。ラーベの歌は、当時この曲を歌った国際的コーラスグループのコメディアン・ハーモニスツ (Comedian Harmonists) の演奏よりもゆっくりしたテンポで、より懐かしさを誘うように感じられます。

ラーベは20, 30年代の流行歌を中心に歌ってきましたが、オリジナルの現代的な曲も手がけ、他ジャンルの歌手とのコラボレーションにも取り組んでいます。ラーベは古い歌謡曲については昔からの歌い方を比較的忠実に守っているようにみえますが、現代的な曲は、親しみやすい題材で歌い方も現代風でより軽やかになっており、ドイツ語を学ぶ学生のみならずにも聞き取りやすいと思います。

現代的な曲もご紹介しましょう。まずはDer perfekte Moment...wird heut verpennt (今日は最高のごろごろ日和、と訳したいところです)、ラーベひとりで歌うものもありますが、ハンブルクを中心に活動するラップ歌手サミー・デラックス (Samy Deluxe) と共演したヴァージョンもおすすめです。Heut' mach' ich gar nichts... から始まるこの曲は、何もしない一日は最高!と歌っています。20世紀に生まれた比較的新しい音楽ジャンルであるラップと20世紀初頭の歌謡曲を演奏するパラスト・オーケストラの音楽を融合させた楽しい曲だと感じます。また、Fahrrad fahr'n (自転車に乗って) という曲は、自転車で楽しく町を駆け抜ける様子が思い浮かぶような曲調で、幼い頃から自転車でも歌っていたというラーベの自転車好きが伝わってくるような曲です。

またラーベは、日本でも評判を呼んだ、ベルリンを舞台にナチスが台頭する時代を描いたド

ラマ「バビロン・ベルリン」(Babylon Berlin) の最新(第4)シリーズの主題歌も手がけています。1920, 30年代の大衆歌謡をベースにしながらも現代の要素を取り入れた音楽を見せてくれるマックス・ラーベとパラスト・オーケストラは、今も活躍の幅を広げています。

ここで紹介した曲のほかにも、ラーベとパラスト・オーケストラのYouTubeチャンネルをはじめ、オンラインで彼らの多様な曲を楽しむことができます。名古屋情報メディアセンターにもCD・DVDがあるので、ぜひ聴いてみてください。

参考資料

- ・Max Raabe & Palast Orchester (YouTube チャンネル)
<https://www.youtube.com/channel/UCXh3cIvGrgFnYYDV4Bzru0Q/videos>
- ・ハインツ・グロイル著、平井正・田辺秀樹訳『キャバレーの文化史1 道化・風刺・シャンソン』ありな書房、1983年
- ・ウォルター・ラカー著、脇圭平・八田恭昌・初宿正典訳『ワイマル文化を生きた人びと』ミネルヴァ書房、1980年
- ・「ドイツ歌謡界の貴公子マックス・ラーベ氏にインタビュー」
<http://www.newsdigest.de/newsde/features/252-max-raabe-interview/>
- ・「Für Frauen ist das kein Problem」(名古屋情報メディアセンター所蔵 請求番号 R76:F92)